

# 夏空に群雄割拠の入道雲 モダン都市でも古風な愛称

夏、まっ盛りである。室内でこの文章を書いているが、窓の外、遠くに入道雲がむくむく湧き起こっている。入道雲は雄大積雲または積乱雲などと呼ばれ、夕立や雷をもたらす。ここにも雨が降り出すだろう。

坂東太郎と呼ばれる利根川、四国三郎の吉野川など、川の愛称はよく知られている。入道雲にも擬人化された名前があった。大阪では、丹波の方向に出る入道雲を「丹波太郎」、奈良の方向に出るのを「奈良次郎」、南に出るのを「和泉小次郎」と呼んだという。丹波の国は、亀岡市や南丹市、丹波篠山市、大阪では豊能郡を含み、大阪から見た場合、北摂の山々のむこうに湧き起こるのが丹波太郎らしい。

西鶴『好色一代男』でも、加太（現・和歌山市）で小舟をこぎ出したところ、「山々に丹波太郎といふ村雲おそろしく、俄に白雨して神鳴 臍をこころがけ」として、「丹波太郎」があらわれて雷雨となる（巻四「火神鳴の雲がくれ」）。紀淡海峡の場面なので丹波からは遠いが、西鶴の脳裏には、大阪（大坂）の北側におきる雲のイメージが焼き付いていて、ここでも登場ということだろう。

京都では、西に出る入道雲が「丹波太郎」である。東に出るのは「近江小太郎」や「比叡三郎」と言ったらいい。四国では、俳人の正岡子規が「夏雲や辰巳にあるを阿波太郎」と詠んだ。「阿波太郎」は讃岐方面に出る雲であった（保育社カラーブックス、伊藤洋三『雲の表情』昭和49年刊ほか）。

各地の入道雲の異名を調べていると、国名に太郎やら次郎やらが付いた名前が多く、源平合戦の武士たちが大空に居並んで名乗りをあげているように思えてきた。

大阪の都心で入道雲をとらえた絵が、大正7(1918)年、織田一磨(1882~1956)の連作版画「大阪風景」のひとつ《天神橋遠望》(表紙)である。織田は少年時代を大阪で過ごし、初代通天閣に孔雀を描いた天井画の制作

も行った。現在の通天閣の天井画は織田の草稿をもとに描かれたものである。

《天神橋遠望》は、中央に石町(現・中央区)にあった教会堂(大阪生神女庇護聖堂)があり、外国スケッチのように見えるが、中之島公園にある、ばらぞの橋付近から東を描いた作品である。正面の鉄橋が明治21(1888)年に架け替えられた天神橋で、部材はドイツから輸入され、付近はライン川の景観のように見えたという話が残されている。

陽もまだ高い夏の夕方。遠くに白くまぶしい夏の雲が描かれ、教会堂にも陽があたって明るい。しかし、手前の空は黒い雲が覆って、雨がパラパラと堂島川に降り始めている。

一雨きて涼くなってほしいと思いつつも、突然の夕立に出くわした体験は誰もあるだろう。この絵も、このあとザアッと大降りになるのかもしれない。空の陰影や川面に映る光は微妙であり、雨を描いた白い線もシャープで夏らしい情緒をただよわせる。

画面は大阪から東向きの情景を描くので、画中の遠くにある雲は奈良方面に出現した入道雲となって「奈良次郎」になるのかな？ モダンな都市景観に古風な愛称の登場である。

では、奈良の人が生駒山の西に入道雲を見たら、なんと呼ぶのか？ 大阪から湧き出した「大阪太郎」か、「浪花次郎」か、奈良にお住まいのかたは、どう呼びますか。

さらによく考えてみると、表紙の絵に夕立を降らしているのは遠くにある「奈良次郎」ではない。後ろから忍び寄った別の雨雲の仕業である。案外これが「村雲おそろしく」と西鶴が書いた「丹波太郎」だったりして。



この小舟が「丹波太郎」に出くわす。  
『好色一代男』挿絵



大阪駅前第3ビルから生駒をのぞむ。入道雲はまだ少ない。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室(現・大阪中之島美術館)から大阪大学総合学術博物館に移った。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ 一増殖するマンモス/モダン都市の現像』(創元社)など。